

第48号

● 目次 ●

巻頭言：中国・モンゴルとの地質研究のつながり	1
最近の研究会、講演会等	2-5
モンゴルの研究機関と東北アジア研究センター	6
センターメンバー紹介	6
センター客員教員紹介	7
活動風景：行ってみて初めてわかることーサバティカルを終えてー	8
編集後記	8


 巻頭言 **中国・モンゴルとの地質研究のつながり**

東北アジア研究センター教授 石渡 明



本号には、主に当センターの文系研究者による中国・モンゴルについての研究集会や講演会の記事が掲載されている。私は理系の地質学・岩石学・地球化学分野の研究者なので、私自身の研究上の中国・モンゴルとのつながりについて若干述べさせていただきます、本号の巻頭言としたい。

私が初めて中国の地質の調査に赴いたのは1989年である。京都大学の坂野昇平教授（故人、私の修士時代の指導教官）を代表とする海外学術研究に参加して、最も高温・高圧（つまり他の岩石よりも地球の深部）で形成された変成岩である「エクロジャイト」の調査を行った。当初はこの年の6月4日に北京に行く予定だったが、この日はいわゆる「天安門事件」の当日であり、情勢が不穏になってきたため渡航を延期し、結局その年の11月に北京から科学院の車で山東省・江蘇省の各地を回った。雪がちらつく厳寒の大陸の風景が、天安門事件の映像と重なって、今でも強く脳裏に焼き付いている。その後、この日中共同研究は1996年まで継続され、石英（水晶）の高圧相であるコース石を含む「超高压変成岩」の発見など、多くの世界的な研究成果を産んだ。中国側の研究代表者であった中国科学院の従柏林教授も既に故人となっているが、この共同研究は中国の若手研究者の育成にも大きく貢献し、参加した若手研究者の中には現在中国の学界で指導的な立場の人が複数いる。これは成功した国際共同研究のよい例だと思う。

一方、私が最初に指導した外国人の博士課程学生が中国内モンゴル出身のモンゴル族の留学生だった（彼は現在湖

南省の大学教員）という縁は15年ほど前からあったが、私とモンゴルとの関係が緊密化したのは最近2年余りのことである。これは、日本地質学会の代表の一人としてモンゴル地質学会との学術交流協定の調印のためウランバートルを訪問したことがきっかけである。その後、モンゴル科学技術大学ゲレル教授の当センター訪問（本誌47号4頁）、モンゴル人の博士課程留学生の受け入れ、若手研究者の当センターへの招へいなど、交流は急速に拡大しつつある。モンゴル人の博士課程留学生ガンバット君は2010年12月～2011年2月に米国の深海掘削調査船ジョイデス・レブリューション号に乗って南太平洋のルイビル海山列の調査を行っている。国際深海掘削計画にモンゴル人が参加するのは、その50年の歴史でおそらく彼が初めてである。モンゴルは内陸国だが、その地質は日本と同様に海の地殻や堆積物が古い大陸（シベリア地塊）の周囲に付加して形成されたもので、過去の海底火山の断片が多量に含まれている。彼の今回の海洋底研究がモンゴルの地質の理解に貢献し、今後のモンゴルの地下資源開発に資することを期待する。

私の専門の研究は現在ロシアとの関係が深く、本年2月7-10日に日露オフィオライト・シンポジウムを当センターで行ったばかりであるが（本号7ページのソコロフ客員教授の紹介を参照）、上述のようなつながりを基礎に、今後も東北アジアの各地域との学術交流を深め、当センターが東北アジアとの学術交流の一大中心に発展するように努力して行きたい。

最近の研究会、講演会等

共同研究「中国華南地方における文化的言説と エスニシティ境界の再編」第1回研究会（11月11日）

本共同研究は、東北アジア研究センターが広く外部の研究者に開かれた研究体制を構築し、国内外における研究拠点としての地位を確立することを目的に導入された、共同研究課題の外部公募制度による最初の企画である。研究メンバーは、東北大学大学院環境科学研究科博士後期課程在学中の稲澤努氏を代表者に、センター外部の大学院博士後期課程在学者を中心として構成され、他に中国広州市の中山大学で教鞭を執る河合洋尚を加え、極めて若く活気あふれる研究組織が出来上がった。唯一「若手」以外では、センター内の教員として華南地域をフィールドとする中国研究分野の瀬川昌久教授が参加している。

今回の研究会は、2010年11月11日14:30～18:00に本センター1階101応接室を会場として開催され、研究発表とコメント、ディスカッションが行われた。発表者と発表題目は以下のとおりである（いずれも敬称略）。

河合洋尚（中山大学専任講師）

「客家空間の生産

— 広東省河源市における文化表象と景観建設」

小林宏至（首都大学東京大学院人文科学研究科博士後期課程）

「福建土楼から客家文化を考察する — 世界文化遺産登録をめぐる文化表象と客家エスニシティ」

稲澤 努（東北大学大学院環境科学研究科博士後期課程）

「漁業をしない『漁民』とは

— 『漁村』の成立過程とエスニックカテゴリー」

金 裕美（宇都宮大学大学院国際文化研究科博士後期課程）

「少数民族地域のトン族と漢族 — 広西チワン族自治区三江トン族自治県の文化保護活動を例に」

コメンテーター

瀬川昌久（東北大学東北アジア研究センター教授）

ディスカッサント

阿部朋恒（首都大学東京大学院人文科学研究科博士後期課程）

研究会の趣旨は、中国におけるエスニシティ（族群）について文化人類学的な角度から実例と理論的枠組みに照らして考察しようとするものであり、特に中国国内における「民族」(nationality)、族群 (ethnic group) という両概念の使い分けを念頭に、前者が政治的概念、後者が「自然発生的」概念と果たして言えるかどうかに着目しながら考察と議論が展開された。

中国の華南地域には、漢族とひとくりにされた人々の中にも言語や習俗の相違に基づいた多様な集団呼称があ

り、今回の事例発表の中では例えば広東河源地域の「水源人」「客人」、貴州東南地域における「六甲人」「麻界人」「桂柳人」等の事例が提示された。これらは自己認識や自他区分を中心に形成されたカテゴリーであり、エスニシティ論で議論されてきたエスニック・グループとは微妙に性格を異にする。この点から、こうした地域的なカテゴリー／集団を「アイデンティティ・集団」という概念で呼ぶことが提起され、それに対する賛否の見解が交換された。

また、こうしたローカルなカテゴリーがエスニック・グループや「族群」として捉え直されてゆく過程において、分類を行う学術的主体のもつ眼差しや、最近の地方文化の資源化の潮流などを通じて、政治性が不可分に付与されることが確認された。特に地方文化の文化資源化については、福建西部や広東河源地域の客家を中心に、最新の事例が豊富に提供された。ただし、文化資源化の潮流に関して言えば、そこに経済的動機付けを読み込むことは比較的容易であるが、「政治性」そのものについては必ずしも提示された事例だけからは明確に捉えることができない等の議論も交わされた。

いずれにしても、華南地域はもともとその文化的多様性から自他区分に基づく小規模なローカル・カテゴリーの分立が著しく、また最近はそのような「差異」を文化資源へ読み替えようとする試みが急激に進んでいることもあり、アイデンティティ・集団からエスニック・グループが析出されてゆく過程を考察してゆくためには、格好のフィールドであることが確認された。（参加者約15人）

（瀬川昌久）



世界文化遺産にもなった福建省西部の客家の円形土楼建築。（撮影・瀬川）

研究会「モンゴル語の辞書をめぐって」

国際ワークショップ「モンゴル語の辞書」

本センターのプロジェクト研究「東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット」と、科研基盤研究(B)「中世モンゴル語研究の統合」(研究代表:栗林均)の主催により、「モンゴル語の辞書」をテーマとする研究会が2回開催された。

第1回研究会は、2010年11月19日(金)に京都の大谷大学で、第2回研究会は2011年2月12日(土)・13日(日)両日に東北アジア研究センターで開催され、モンゴル国、中国、日本の研究者が参加し、「モンゴル語の辞書」について文献学的・言語学的な観点から研究発表と討論を行った。

第1回研究会は、2010年11月19日(金)午後2時より、大谷大学響流館3階マルチメディア演習室において、「モンゴル語の辞書をめぐって」というテーマで、次の5件の研究発表が行われた。

- ・「チベット・モンゴル語辞書の歴史的伝統」
L.テルビシ(国立民族学博物館客員研究員)
- ・「『欽定同文韻統』について」チャガンサル(内蒙古大学)
- ・「海山編訳『蒙漢合璧五方元音』(1917年)とモンゴル語近代語彙」フフバートル(昭和女子大学)
- ・「アラビア字による中期モンゴル語語彙集」
斎藤純男(東京学芸大学)
- ・「『御製滿珠蒙古漢字三合切音清文鑑』(1780年)におけるモンゴル語の特徴」栗林均(東北大学)

これらの発表では、時代的には中世紀から近代まで、また言語ではチベット語、アラビア語、漢語、満洲語等が関連する「モンゴル語の辞書」が取り上げられた。

研究会の参加者は30人を越え、研究会後、同大学のカフェで懇親会が開催され、参加者の交流が行われた。

* * *

第2回研究会は、国際ワークショップ「モンゴル語の辞書」として、2011年2月12日(土)の午後と、13日(日)の午前中の両日にわたって東北アジア研究センターの4階大会議室で開催された。

ワークショップでは、全11件の研究発表が、次のように4つのセッションに分けて行われた。

第1セッションでは、「清朝におけるモンゴル語辞典とその伝統継承」というテーマで3件の発表が行われた。

- ・「清代におけるモンゴル語辞書の発展と変遷について」
春花(中国故宮博物院図書館)
- ・「清文鑑から『蒙文総彙』へー近代モンゴル語辞典の成立過程ー」栗林均(東北大学)
- ・「『二十八卷本辞典』ー現代モンゴル語辞典としての試みー」
呉人徳司(東京外国語大学)

第2セッションでは、ヨーロッパと日本における近代のモンゴル語辞書の特徴に関して、4件の発表が行われた。

- ・「シュミットの『蒙独露辞典』(1835)について」
満永葉子(中国語・モンゴル語翻訳者)
- ・「コワレフスキーの『蒙露仏辞典』(1844-1848)の構成と特色」Ts.スフバートル(モンゴル国立大学)



第1回研究会、会場風景

- ・「陸軍省・編『蒙古語大辞典』について」
内田孝(滋賀県立大学)
 - ・「キリル文字正書法確立前のモンゴル語口語辞典の表記について」角道正佳(大阪大学)
- 2日目の午前中に行われた第3セッションでは、漢蒙対訳語彙・辞典について、次の2件の発表が行われた。

- ・「『登壇必究』における漢一蒙語彙について」
フレルバートル(内蒙古大学)
 - ・「海山編訳『蒙漢合璧五方元音』(1917年)について」
フフバートル(昭和女子大学)
- 第4セッションでは、チベット語・モンゴル語対訳辞典とその利用について2件の発表が行われた。

- ・「清代のチベット語・モンゴル語辞典について」
松川節(大谷大学)
- ・「仏典翻訳に見られる辞書類利用の実態について」
樋口康一(愛媛大学)

ワークショップ初日の12日(土)は、全国的に朝から降雪が報じられ、仙台でも10センチほどの積雪があったが、昼過ぎには小降りとなり、全国各地からの参加予定者も遅延無く揃って開会することができたのは幸いであった。

研究会は、岡洋樹・副センター長の開会の挨拶のあと、2日間にわたって研究発表と活発な討論が行われた。参加者は、50人以上にのぼり、12日(土)の夕方市内のビアレストランで開催された懇親会にも40人が集い、盛況を呈した。

ワークショップでは、研究発表の予稿集(108頁)を製作し、参加者に配布した。

(栗林均)



第2回研究会、発表風景

●東北大学東北アジア研究センター公開講演会

「モンゴル世界を考える ―― その歴史と現在」

平成22年12月11日(土)、仙台市戦災復興記念館で開催された本年度の公開講演会は、モンゴルを、歴史と現在の両面から考えるもので、本センター栗林均教授の総合司会の下、岡洋樹教授と滋賀県立大学人間文化学部ボルジギン・ブレンサイン准教授が講師を務めた。

周知のように、現在モンゴルと呼ばれる民族は、モンゴル国と、中国の内モンゴル自治区、新疆ウイグル族自治区、青海省及び周辺の諸省に分布している。またロシア連邦には、モンゴル系のブリヤート民族とカルムイク民族がいる。さらにモンゴルと文化的に深いつながりのある民族として、やはりロシア連邦トヴァ共和国に暮らすトヴァ民族がある。今回の講演会では、岡が近世・近代におけるモンゴル民族の歴史的歩みを述べ、ブレンサイン氏が内モンゴル人の立場から、モンゴル国との関係、日本に暮らす内モンゴル人の自己認識や日本人のモンゴル理解について論じた。

岡の講演「東北アジア史の中のモンゴル」は、清代から近代にかけてのモンゴル史の中で、モンゴル人が内外モンゴルに分かれた経緯と、日本との関わりを論じた。モンゴル人は、17世紀にはブリヤート人とカルムイク人がロシアの支配下に入る一方で、現在の中国内モンゴルとモンゴル国、それにトヴァ共和国の住民が、満洲人が建国した大清国に服属した。大清国は、モンゴル人を満洲人や漢人から区別し、チンギス・ハーンやその弟達の子孫であるボルジギン氏王族を初めとする貴族達による間接統治下においた。だいたい万里の長城を境として、南は漢人が居住する伝統的な中国であり、北がモンゴル人が住む遊牧地とされた。

近代になると、列強の進出に苦しむ清朝は、中国本土とモンゴルなど辺境地域の統治区分を次第に撤廃した。とくに北のロシアと東の日本の進出に対抗するために、モンゴル地方への漢人農民の入植を進めていった。これに反発したモンゴル人は、1911年に外モンゴルを中心に独立運動を起こしたが、これが現在のモンゴル国となる。一方内モンゴルは中国の統治下に残り、内モンゴル自治区などで民族自治を与えられた。この間、ロシアや日本は、モンゴルの

自治・独立運動に深く関わったのである。

このような近代モンゴル人の歴史は、現在もモンゴル人の心に大きな影響を与えている。ボルジギン・ブレンサイン准教授の講演「現代の眼差しでモンゴルを見よう――日本・モンゴル関係の過去と現在――」は、近代内モンゴルでは、東部で遊牧民の農耕民化が進むなど、モンゴル人のあり方に多様性をもたらし、「モンゴル人とは誰のことを指すのか」を一言で表すことが難しくなっていること、また日本人は、モンゴル人を遊牧民とするステレオタイプのなモンゴル理解に基づく親近感をもっているが、一方で日本人のモンゴル観には戦前に関わった内モンゴルの姿が影響していること、戦後日本人は長らく直接モンゴルを訪れることができなかったが、その間もステレオタイプの理解は維持されたこと、一方で遊牧のユートピアとしてのモンゴル理解が、日中関係の中で苦闘し、かつ農耕化など変容しつつある内モンゴルを正しく理解できなくしていること、また行き過ぎた近代化に対する反省からのモンゴル好きも見られるが、このような単純化された理解では責任あるモンゴル観は育たないことなどを論じるとともに、中国内モンゴル自治区の現状について紹介した。講演の後、両講師は会場からだされた質問に答えた。

ブレンサイン氏も言うように、モンゴルは我が国でも比較的関心の高い国の一つである。とくに近年はモンゴル人力士の活躍などもあって、日本人にとってモンゴルは非常に近い国の一つになったと言ってよい。とはいっても、遊牧を基盤とする独特の文化や、農耕化をめぐるモンゴル人（とくに内モンゴルの人々）の考え方などは、必ずしも十分に理解されているとはいえない。総じて外国理解に完璧な正確さを期待することは難しいのだが、日本は近代の歴史の中で、モンゴルとは浅からぬ関係を持ってきたことも事実である。正邪善悪の評価はともかくとしても、そのような歴史を、我々はずっと思い出してもよいのではないか。その上で、我々はこの東北アジアの隣人達とどのようにつきあうのか、考えてみるべきだろう。

(岡 洋樹)



質問に答える岡・ブレンサイン両講師



講演会会場の様子

第6回特別推進研究

「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会の開催 (11月21日)

文部科学省科学研究費補助金 特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」では、研究情報の交換と研究成果の公表を意図し、東京で第6回研究会を開催した。

当日のプログラムは、以下のとおり。

- 日 時：平成22年11月21日(日)
 10：00～16：30 (9：40開場)
 会 場：フォーレスト本郷 会議室
 (東京都文京区本郷6-16-4)
 10：00 - 10：20
 特別推進研究の新体制と研究課題 代表
 10：30 - 11：50
 「宮廷演劇『混元盒』の成立と上演」
 山下一夫 (神田外語大学)
 13：00 - 14：20
 「朝鮮・洪大容『乙丙燕行録』にみえる
 清代北京の演劇」
 金文京 (京都大学)
 14：40 - 16：30
 研究状況報告 (研究メンバー全員)

最初に、研究プロジェクト代表の磯部彰が平成22年度からの新体制と研究テーマの概略を紹介した。

ついで、神田外語大学の山下一夫先生から、宮廷劇『混元盒』という宗教劇の特色や関連する中国小説などとの関連について講演をいただいた。山下氏は、今回から研究協力者として参加することになる。中国民間芸能・演劇・小説の専門家、宮廷大戯の一つ『封神天榜』の研究もある。



『迎鑾図』(部分) 乾隆帝南巡の折、蘇州で水上戲台で観劇をした。



山下一夫先生 (神田外語大学) の研究発表場面

当方の研究会には強い味方である。

昼をはさんで午後は、研究分担者の金文京氏が朝鮮朝の北京使節員の一人、洪大容が残した『乙丙燕行録』を通して、北京城内の演劇などを朝鮮国の官員がいかに見聞したかについて紹介をした。金先生はハングル表記版と漢文版双方を用い、ハングル版には漢文版にない「本音」が留められている点について、いくつかの例を通して示した。

研究状況の発表では、今年度から研究分担者に加わった中見立夫氏がサンクトペテルブルグの中国演劇文献の収蔵状況について、杉山清彦氏が清朝グルンの八旗体制の構造について、加藤徹氏が清朝後期の北京の地方劇について、小松謙氏が『如意宝冊』全体の概要や曲調、小説との関係について、それぞれ報告した。

また、磯部祐子氏が宮廷写本の分類と名称を整理した報告書をもとに、安殿本以下の区分を説明した。高橋智氏は内府本について、大塚秀高氏・鈴木陽一氏はそれぞれ中国小説と担当演劇について、磯部彰は新資料「迎鑾図」を通して清帝の南巡と演劇の役割を紹介した。昼食時の会合で、次の開催地は、琉球使節の本拠である那覇市で行なうことを決めた。

今回もメンバー以外、仙台及び東京の若手研究者が参加して本研究層を拡げることとなり、研究体制の充実に応える形の研究会となり、情報交換を含めてその役割を十分果たした。

なお、当研究ではHP (<http://eapub.cneas.tohoku.ac.jp/court/>) を作成し、公開している。

(磯部 彰)

モンゴルの研究機関と東北アジア研究センター

東北アジア研究センターではモンゴルとの共同研究、学生・研究者受け入れが盛んであり、東北大学のモンゴル人留学生在籍数（35名）が国の人口に比べて飛び抜けて多いのも、本センターの活発な活動が一つの理由だと考えています。2010年10月、岡副センター長と私がモンゴル科学技術大学地質学部の設立50周年記念会とそれに付随する国際シンポジウムへ出席し、合わせてセンターと関係の深い研究機関を訪問いたしました。

モンゴル科学技術大学はモンゴルにおける工学系の最も有力な大学であり、1997年同大学地質学部のO.ゲレル教授、続いて2001年には当時の同大学学長D.バダルチ教授をセンター客員教授として招聘しました。こうした関係から2001年東北大学との間で大学間学術交流協定締結に至りました。既に東北大学で学位を取得した数名の卒業生が母校で教鞭を執っています。ゲレル先生が主宰するジオサイエンスセンターとは部局間交流協定も締結しており、地質系の学生がセンターでは佐藤が、また東北大学内では理学研究科藤巻教授、環境科学研究科土屋教授などの下で研究に携わってきました。また本センター石渡教授はモンゴル地質学会の代表としゲレル教授を日本に招聘しています。今回の訪問ではB.ダムディンスレン学長を表敬訪問しました。

一方、モンゴル科学アカデミーはモンゴルにおける最も重要な研究機関としての役割を担っており、東北大学とは2000年に学術交流協定を締結しました。岡教授が歴史研究所と深い交流を続けており、これまでお二人の所長A.オチル博士（1997年）、Ch.ダンダワー博士（2006年）をセンターで客員教授としてお迎えしました。今回の訪問では歴史研究所長S.チョローン博士、言語・文献研究所長D.トゥムルトゴ博士、国際研究所長L.ハイサンダイ博士らを研究所

に訪問した後、本センターでも2年間研究員の経験のあるリモートセンシング研究所研究員アマルサイハン博士と共にB.エンフトゥヴシン・モンゴル科学アカデミー総裁を表敬訪問いたしました。更に本センター出身のL.アルタンザヤ教授が国際交流部長を務めているモンゴル国立教育大学B.ジャダンバー学長と意見交換をいたしました。

今回の訪問では本センター卒業生で、現在アカデミー歴史研究所研究員であるO.オユンジャルガルさんに通訳をお願いしました。また私の研究室卒業生でウランバートルで活躍するアマルサイハン博士、資源・石油省地質情報センター研究員ウネマンダフさん、モンゴル科学技術大学講師ツエギーさん、建設会社経営ガンチュルンさんに集まっていたいただき、研究室同窓会を開催しました。本センターが主体となっている大学間学術交流協定や、長年培ってきた人的交流が、モンゴルにおいて、着実に大きく実を結びつつあることを感じてきました。

（佐藤源之）



モンゴルで活躍する卒業生と

◆ センターメンバー紹介 ◆

山口未花子（教育研究支援者）



昨年11月より、東北アジア研究センターの教育研究支援者に着任しました。私の専門は、生態人類学で、自然環境のなかで人間がどのように生活しているのかを研究しています。そのなかでも特に動物と人間の関係に興味があり、これまでに宮城にも基地がある日本の

小型沿岸捕鯨や北方の狩猟採集民といった、野生哺乳動物の獲得を生業としている人々を研究してきました。

特に、5年ほどフィールド調査を続けているカナダ先住民カスカの人々は、伝統的に農耕や牧畜をすることがなく、ほぼ100%のカロリーを野生動物（や魚、鳥）から得てきました。これまでの研究から、近代化が進んだ現在も生活のなかに狩猟採集活動やそれによって獲得した資源の利用が占める割合は高く、コミュニティレベルでの分配などを通してカスカ社会を支えていることが明らかになりました。同時に、カスカの人々は動物を「自分たちが自由に利

用できる資源」とは考えておらず、尊敬と畏怖の念を持ちながら動物と対峙し、動物からの贈り物としてその肉を受け取るという動物観を持つことが明らかになりました。動物を最も殺してきた人々が、動物を対等以上の存在とみなす世界観を持つことは、日本で暮らす私たちには少し不思議に思えるかもしれません。今後の研究においてはそうした認識の形成について、従来の研究領域である言語や神話、規範といった項目と共に、生態学的な側面からもアプローチしていきたいと考えています。

また、センターでの職務である「シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット」の支援活動を通じ、シベリアを中心とした北方諸文化と北米における人類生態の差異及び普遍性について比較検討したいと考えています。さらにセンターには、文系理系を問わず、多様な専門を持つ研究者の方々が集まっていることから、共同研究などを通じてより学際的な議論への発展や、成果の還元に取り組んでいけるのではないかと期待しています。

● センター客員教員紹介 ●

李 晶 (り・しょう) 准教授



旧伊達藩別邸・鍾景閣にて筆者と
(撮影・佐藤センター長)

李晶先生は、昨年9月1日から本年1月31日まで本センターの客員准教授として滞在しておられた中国出身の文化人類学者です。1958年に内蒙古で生まれ、大学在学中以来ずっと日本語を専門としてこられました。その後日本社会をより深く理解したいという念願のもと、文化人類学を専攻されました。今回はその「念願」実現のため、日本の農村でフィールドワークをすることを目的に来日されました。一昨年の夏に下準備で一度仙台に来られたこともあって、今回の来日では仙台到着早々に周囲農村を周り、あらかじめ調査地点候補としてねらいを定めていた仙台近郊の秋保地区にバイクで足繁く通われました。

われわれの専門である文化人類学は、何よりも現地社会の中に飛び込んでいって人々の生活を観察し、人の話を聞き、さ

らには現地の行事や生活にも参加して、内側から社会・文化を理解しようとする点に特色があります。李晶先生の場合、もともとが日本語専攻だったこともあって日本語は大変達者で、仙台周辺の農村のいささか方言のきつい日本語も苦勞なく理解されているようです。また、現地では農家の稲刈りや神社のお祭りなどにも参加し、地域に大変とけ込んでおられます。本センターがこれまでお招きした客員の先生方の中でも、日本でのフィールドワークにこれほど本格的に取り組みられたのはおそらく李晶先生が初めてと思われる。

先生と話していると、われわれが気づかなかった新鮮な角度からの日本農村の理解についてうかがうことができ、大変参考になります。なにより、昨今の日本国内の報道や論説は、日本農村の崩壊し行く姿、負の側面のみを誇張して語る傾向がありますが、李晶先生は「他者の目」を通じて日本農村のまだまだしっかりしている側面、他国では容易に見出し得ない日本の農村社会ならではの特色など、日本農村のポジティブな特徴をきちんと把握し、言葉にしておられるのが印象的でした。李先生の今回の招聘を機に、このようにお互いがお互いの社会を実地に調査し合い理解し合うことを通じ、学術研究の真の双方向的な交流が実現されるのだという思いを強くしました。
(瀬川昌久)

ウラジミール・ヤクボフ 教授

佐藤教授に招聘され、客員教授としてセンターに滞在するウラジミール・ヤクボフと申します。現在63歳ですが私はロシアの小さい町チタで生まれ、1965年からトムスクで暮らしています。トムスクはロシアのほぼ中央に位置し、ノボシビルスク、クラスノヤルスクやオムスクなど日本でもよく知られた街に囲まれています。トムスク市街を流れるトム川はやがてオビ川に注ぎ、最後には北極海に至ります。トムスクは地方行政の中心地で、400年の歴史を持っています。トムスク州は31万平方キロメートルであり、日本の領土面積の83%にも相当します。ほぼ全域がタイガで覆われ、人口密度は1平方キロメートルあたり5人程度しかありません。石油、天然ガス、石炭や金属、建材資源、ピートの他、地下水、地下熱水などの天然地下資源にも恵まれています。

しかしトムスクの最も貴重な資源は学術であると思っています。トムスクにはトムスク国立大学、トムスク・ポリテク大学を始め7つの大学がありますが、これら2つの大学は最近、研究大学の認証を受けました。またトムスクの住民の約5人に一人は学生です。大学だけでなくトムスクにはロシア科学アカデミーシベリア支部 (SBRAS) の9つの研究センター、5

つの研究所があります。住民における博士号保持者の比率はモスクワやセント・ペテルブルグを凌ぎます。

私はトムスク国立大学の教授を17年間務めており、現在シベリア物理・技術研究所電波物理部門の学部長です。長年にわたり私の研究は基礎から応用まで幅広い範囲での物質中の電波伝搬にかかわるものでした。最近では隠れた物体の3次元的な電波イメージングへの応用を行っています。この課題は地質学、遺跡調査、テロ予防や安全・安心分野での建物に対する非破壊検査など人間活動に多様な関わりを持っています。

私の今回の東北大学滞在中では特にUWB / SAR (超広帯域合成開口レーダ) による地中レーダ (GPR) の分野での研究を深めることを目的としています。訪問の実現に努力をいただいた東北大学井上総長や研究ホストである佐藤源之教授に感謝いたします。

(翻訳：佐藤源之)



セルゲイ・ソコロフ 教授

2011年2月1日にロシア科学アカデミー地質研究所 (モスクワ) のセルゲイ・D・ソコロフ教授 (副所長) が本センターの客員教授として赴任された。教授の専門は地質学、特に構造地質学と層序学である。1970年代に欧米の地質学はプレート理論によって完全に再構成されたが、日本とソ連ではプレート理論の受容が遅れ、プレート理論に基づくソコロフ教授の論文は長い間目の目をみななかった。しかし、1980年代後半からプレート理論に基づくロシアの地質の再検討が始まり、ソ連崩壊後の1992年に出版されたソコロフ教授の「環太平洋造山帯コリヤーク・チュコートカ地域の付加テクトニクス」(ロシア語) はプレート理論に基づくロシア地質学の最初の成果の一つとして名高い。その後、教授は私との共著論文を含め、ロシア極東地域の地質構造発達史に関する多数の論文を国際学

術誌や国内誌に発表している。私は1990年のコリヤーク山地における「野外セミナー」で最初にソコロフ教授とお会いし、その後8回の共同野外調査と2回の日露二国間共同研究を実施してきた。本誌42号2頁に報告した2009年のチュコートカ地域の調査もソコロフ教授のグループと共同で行ったもので、本年2月7-10日に本センターで行われた日露オフィオライト・シンポジウムにもソコロフ教授とそのグループのロシア人研究者4人が参加した。今回の教授の滞在を機に、ロシア科学アカデミー地質研究所と本センターの学術交流が一層深まることを期待する。2月28日まで滞在される。(石渡 明)





行ってみて初めてわかること –サバティカルを終えて–

東北アジア研究センター助教 後藤 章夫

2009年12月から約1年間、研究に専念する機会（サバティカル）を頂き、アメリカのニューメキシコ工科大学（New Mexico Institute of Mining and Technology; 通称New Mexico Tech）に滞在しました。海外ではサバティカルというと、教授クラスの先生方が数年に一度取得し、在外研究のほか、教科書執筆などに専念するのが普通ですが、日本では比較的若い研究者が経験を積むために、海外に出るのにもよく利用されています。東北アジア研究センターでは2006年7月にサバティカルの制度が作られ、私とその第一号となりました。大変有り難いことと感謝しています。

ニューメキシコ工科大学は、ニューメキシコ州最大の都市アルバカーキ（Albuquerque）の約120km南の砂漠地帯、人口9000人ほどのソコロ（Socorro）市にあります。ソコロの歴史は1598年のスペイン人入植まで遡り、19世紀終わりには鉱山ブームで人口4500人に達しました。背後の山には鉱業を意味するMiningの頭文字を取ってMの文字が描かれ、“M Mountain”と呼ばれ親しまれています。1893年には大学の前身となる鉱山学校が、2人の教授と7人の学生で始まりました。大学は現在、物理学、地球科学、情報科学など、理工学を広く研究対象とし、1900人ほどの学生が在籍します。規模は決して大きくありませんが、その研究レベルは全米でも高く評価されています。

私はここ数年、火山噴火に伴う空気の振動（空振）に興味を持ち、その分野で精力的に研究を進めているJeffrey Johnson博士のもとを頼りました。実は彼とは学会で一度会っただけで、たぶん実績のない私のことなど、覚えていなかったと思います。それでも当たって砕けろで受け入れを打診したところ、意外にもほとんど二つ返事でOKされました。あとで聞くと、手弁当で来るのだから居場所さえ確保すればよく、成果が伴わなくても構わない、その意味でリスクが少ないから、ということでした。私が同じ立場でそうできたかはわかりません。彼にはとても感謝しています。



巨大なサンドイッチ。
これで4ドル99セント。

滞在中は日本から持参し

たデータの解析のほか、チリやハワイへ観測に行きました。チリでは片道3時間以上かけて標高2840mの火山に毎日登るなど、かなりきつい観測でしたが、お陰で良好なデータが得られ、その成果は論文として学術雑誌に公表されました。

大学の雰囲気は、全般に日本よりかなりのんびりしています。時々子供を連れてきたり、中には犬を連れてくる人もいました。昼休みにプールやジムに通うのは珍しくありませんし、多くの人は4時頃には研究を切り上げ、5時にもなれば、建物はひっそりとしています。日本では7時や8時までいるのは普通だと話すと驚かれました。それでも着実に成果を挙げるのは、メリハリと、時間を無駄にしないことに秘訣があるのでしょうか。

プールやジムに通うのは、健康のためや趣味だけでなく、野外調査のために体を鍛えるという側面も少なからずあります。私もチリに行く前にジム通いを勧められました。帰国の直前にあった、M Mountainの“M”の字を書く白い粉を山に担ぎ上げるイベントでは、タイムトライアルの上位を占めたのは教員でした。学生に自らの体力と、その重要性を見せつけているのです。

砂漠の田舎町での生活は退屈と思われるかもしれませんが、決してそんなことはありませんでした。ちょっとしたことに考え方や文化の違いを感じたり、新しい発見があったりと、刺激に満ちた毎日でした。たとえば、海外では靴のまま家へ上がると思っていたのですが、実際には脱ぐ人も多くですし、逆に裸足で庭に出たりもします。どうやら、家の中と外をあまり区別しないというのが本当のところのようです。

東北アジア研究センターは、現場主義、フィールドワーク重視を掲げています。今回のサバティカルでは、そこに行ってみなければわからないと感ずることが本当に多くありました。自分の専門の研究よりも、色々な意味で今までにない様々な経験を積めたことが、一番の収穫だったと思います。



学内にある18ホールのゴルフコースと、その奥に見える“M Mountain”。



今号が校正作業中だった3月11日、私たち東北地方の住民全員を東北関東大震災という日本史上最大の天災が襲いました。特に東北地方太平洋岸の町々の津波による破壊の酷さには目を覆われます。被災された方々に心よりお見舞いを申し上げます。また、大学施設と印刷所の被災により今号の刊行が遅れたことについて深くお詫言申し上げます。
(柳田賢二)